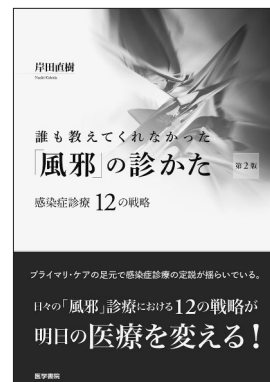


BOOK Review

誰も教えてくれなかった 「風邪」の診かた 感染症診療 12の戦略 第2版

評者 倉原 優 国立病院機構近畿中央呼吸器センター呼吸器内科



今だから言えるが、一昔前は、風邪というのはエビデンスがあつてなきような診療が当たり前だった。主たる切り口は、抗菌薬が必要か否かだった。私は感染症に強い病院で初期研修を受けたため、どちらかといえば珍しい疾患を診ることが多く、風邪診療にわずかな不安を抱えていた。

この本の初版が出版された2012年、風邪の医学書なんて目にすることがなかった私は、即座に通読した。驚いた。知らないことが山のようにあった。そして、自らの不勉強を恥じた。風邪とは斯くも深い感染症だったのかと痛感した。

優れた感染症医には、優れた総合診療医が多い。この理由は、感染症であることを診断するためには、それに擬態する他疾患を見抜かなければならないからだ。最もコモンな感染症は、間違いなく風邪である。世界一のスピードで高齢化が進んでいる日本では、高齢者の風邪を

どう診るかが重要になるのだが、この本の真骨頂は実はそこにある。最も患者数が多く、かつ最も書くのが難しいと思われるテーマを、岸田直樹先生は今回の第2版で大きく取り上げたのだ。高齢者の風邪について、100ページも割いている。

高齢者の風邪に対して、何でもかんでも「抗菌薬は不要」と切り捨てるべきでないこと。無用な抗菌薬を処方する医師に対して、エビデンスベースドな医師はそれを叩きがちであるが、行き過ぎると、慎重に鑑別を要する高齢者に対して「抗菌薬が不要な風邪」という誤断を下してしまうリスクがある。また、感染症の世界ではde-escalationが美的とされる風潮があるが、決して全てがそうではないことをロジカルに説明している。

ぜひ手に取ってもらいたい。芸術的とも思えるほど、極めて高い完成度である。

岸田 直樹 著

A5判/338頁/2019年/定価(本体3,500円+税)/ISBN978-4-260-03963-5/医学書院刊